研究論文

ドイツ郷土保護連盟の設立から1920年代までの
郷土保護運動の変遷

赤 坂 信*

Der Wandel der Heimatschutzbewegung in den
25 Jahren nach ihrer Gründung

Makoto AKASAKA*

摘要：ドイツ郷土保護連盟の設立(1904)の歴史的背景と社会的動機を探り、連盟の改称が提起されるまでの四半世紀間の活動内容及びその変遷を明らかにすることを目的とした。郷土保護運動の当初の段階は近代的発展によって郷土の風景や生活習慣が消失していくことに対する抗議や救済が主目的であった。やがて保護育成の対象は郷土の空間の構成するモノから郷土を担うヒト(Volk)へ移行する。すなわち望ましい民族の育成が課題となっていく。

1. はじめに

19世紀後半の農村風景の変貌ぶりについて造園家イエーガー(JÄGER, H. 1987)は「いたるところで耕地整理が進行して農地はまっすぐな道で四角に区切られ、小川も直線となり、岸辺の繁みはとりはらわれてしまった。」と昔ながらの風景が消えていくことを嘆いている。¹⁾ 1870年代から始まるドイツの工業化の第二の波は、長期かつ広域にわたる人口流動(Fernwanderung)をひきおこした。この大規模な人口流動は、産業政治全般のみならず、人々の日常生活における価値観に対しても転換をせまるものであった。これによって長い間伝えられてきた文化・習慣が失われていったが、こうした社会的な動きに対して古いものやなつかしいものをとどめておこうとする運動がおこった。すなわち、農村から人口が流出することによって生じる文化・習慣の消滅、また逆に大都市に人口が集中することによっておこる文化的な摩擦や精神的な荒廃といった現象が、これを押しとどめようという動きを生じさせたのである。これがのちに復興運動(Erneuerungsbewegung)といわれる一大文化運動としてヨーロッパ全土にひろがった。郷土保護運動はこうした復興運動の最も大きな部分を占めていたといわれている(BERGMANN, K. 1970)。郷土保護運動の発生については、当時の市民層の民俗学への関心の高まりが原因のひとつに考えられよう。古くてなつかしいものに対するロマンチックなあこがれを背景とする民俗学的関心とは、ドイツの国の人々の歴史を確認するにとどまらず、その民族性(Volkstum)の超時代的な法則

性の探索にいたる内容のものであった。出生地や住みなれたところ、すなわち郷土を捨てて都市に集中する民衆に再び郷土(意識)を与えねばならないというイデオロギーや、根なし草のような民衆に同一民族という共通項を強調することで民族性にもとづく精神的な統一を求める動きが郷土保護運動において、次第に前面に出てくるのである。その結果として具体的には郷土保護連盟の「郷土保護」を「郷土育成」とすべきだという改称が提起されるにいたるのである。本論では郷土保護運動がどのような背景で生まれてきたのか、郷土保護連盟の結成の過程と連盟の活動がどのようなものであったのかについて力点をおく。そして保護育成すべき「郷土」とは何であったのかについて考察したい。ただし本論で扱う時代区分は主として郷土保護連盟設立(1904)前後から、連盟の名称変更が提起される(1927)頃までの四半世紀の間とする。

2. 復興運動の社会的背景と郷土保護思想²⁾

(1) 人口流動の激化と郷土喪失の問題

19世紀後半から20世紀初頭にかけて、ドイツの歴史上最大といわれる国内の人口流動が記録されている。1860年から1925年の間に約2,200~2,500万人がそれぞれの出生地であるLandやProvinzの境をこえて流動した。マックス・ウェーバー(1893)は19世紀末の人口流動の一例を「土着の農業労働者は姿を消し、そのかわりに農業労働力がたえまなく東部地方から吸いよせられる。その農業労働力もしばらくするとまた工業の方へ移動する。

*千葉大学園芸学部

そうすると次の新しい労働力が東部から補充される」と描写している。³⁾ こうした人口の激しい流動性 (Mobilität), すなわち「郷土」を離れる人々の急増は、農業を経済基盤とする保守勢力にとってきわめて憂慮すべきものであった。その理由の第一は生産力の低下であったが、このような社会の動きが従来の支配関係に重大な変化をもたらすのではないかという不安を保守層にいださせるものであった。⁴⁾ たとえば、1907年にはすでにドイツ人の2人に1人はなんらかのかたちで国内の人口流動に関与したことになるという。⁵⁾ また1,000人以上の人口を有するドイツの都市の1871年から1925年の増加の状況を見ると、その半世紀間に小都市 (Kleinstädte 5,000~20,000人) の数はほとんど変わらず、中都市 (Mittelstädte 20,000~100,000人) では倍増、大都市 (Großstädte 100,000人以上) は数倍を示している。⁶⁾ こうした第二の工業化の波とよばれる1870年代からのドイツ西部の工業的発展は、上述の大規模な人口流動をひきおこした。高度に工業化され都市化されつつあったドイツ西部は経済面での将来の担い手として発展し、社会的には全く新しい構造を持ち、政治的にも力をもった。この西部が、さらに農業的な発展をつづけるドイツ東部の政治的・経済的な対極となるのである。

人口流動は、国境をこえる問題となっていた。ドイツ東部では、19世紀後半において外国人 (主としてロシア系ポーランド人) の農業労働者の流入問題があった。ことに1880年代から90年代にかけて外国人労働者の流入に関して禁止・緩和・制限がくり返された。というのは、ドイツ東部の政治・経済を支えていた大土地所有とその労働制限は組織的に崩壊していたが、大土地所有の維持のためには、労働力を確保する必要があり、一方政治的にはこれを制限または禁止しなければならない事情を抱えていた。さらにウェーバーは、この大土地所有の問題について「東部の大土地所有者の存在をみとめるが、功績は当の人物ではなく、むしろこの人物を生み出した母胎という社会組織なのである」としながらその組織が今や崩壊し、これが長びけば慢性的腐蝕へと進むと警告している。まず問題解決の大前提として、「窮極に頼れるのは大土地所有だけだ」という考えは捨てなければならない」ことをあげ、国家の最重要課題に「東部地方におけるドイツ文化を擁護すること、平和のうちにあっても東部国境とドイツの民族性を防衛する」ことを主張している。これをショーヴィニズム (好戦的盲目的排外愛国主義) と批判するのはあたらないとしながら、その実践のためには「即刻、東部地方からロシア系ポーランド人労働者を無条件に閉め出すべし。とりあえず過渡的段階としてすぐに着手すべきことは穀物の収穫期以前にドイツに入ってくるすべての労働者を閉め出すことである。だがこのことを無条件に行うという決断が必要である」と

ウェーバーは明言している。⁷⁾ ここに19世紀末におけるドイツの文化・民族性の崩壊に対する危機感をみることができる。これは郷土保護思想の根本にある防衛的性格とも共通するものである。

(2) 復興運動にみる「農業ロマンチズム」と「大都市嫌い」の傾向とその背景

19世紀後半からの歯止めのない経済 (工業・農業) 開発の動きは、生活上の価値観に大きな転換をもたらしたが、これに対する反作用も生じていた。これがのちに復興運動 (Erneuerungsbewegung) といわれるものである。こうした運動の原因に、政治的経済的な側面と文化的側面が考えられる。1870年代以来の大規模な人口流動は、具体的にはドイツ東部の農業地域から工業化の進展しつつあった西部、すなわちラインやルール地方への人口流出である。これに対して東部の農業を経済基盤としてきた旧来からの支配勢力は農村 (農地と農民) の維持をはからねばならなかった。19世紀後半にドイツは穀物の輸出国から輸入国へ転じたが、まだ農業は重要な生産基盤であった。しかし、保守勢力はさらに自己の利益保持のために、工業化時代の新勢力と拮抗しながら、農業の保護政策に力を入れた。世界に衝撃を与えた経済理論は、まさにこうした時代に生まれ、生産形態の起源や富の配分と利潤の行方をめぐる論争は、常に農村 (農地と農民) を共通の基盤としていた。19世紀後半、とくに世紀末から今世紀にかけて農業界で最も顕著な役割を果たした圧力団体である農業者同盟 (Bund der Landwirte) はその綱領 (1893) に「農業は指導的産業」であり「帝国の柱」と主張し、外見上は民主的で近代的な組織形態をとりながら貴族やユンカーによる支配を貫徹し、しかも農民層を広汎にひきつけた。これは農業保護のみならず、農民の保護をも唱えようとするものであったが、基本的にはユンカーの利益が第一要件であり、ユンカーの利益に抵触しない範囲でのことであった。⁸⁾ すなわち、経済的利潤のもたらす農地と農民 (すなわち農村) の擁護は、領主と農民との間の旧来の秩序の維持を意味することであった。こうした政治的経済的な側面のほかに、復興運動の背景となった文化的な側面とは、都市地域、工業地域への急激な人口集中がもたらした生活環境の悪化と慣習倫理の亡失に対する反感から生じた大都市嫌い (Großstadtfeindschaft) と農業ロマンチズム (Agrarromantik) の傾向である。ドイツのロマン主義の伝統をひく文化史家であるリール (RIEHL, W.H. 1823~1897) は保守主義の立場から期待される農民像をつくりあげた。「ドイツ農民は、わが祖国では他のヨーロッパ諸国にはみられないような政治上の意味をもっている。すなわち、農民はドイツ国民の未来なのである。われわれ民族の精神を元気づけ、若がえらせるのはひとえに農民階層なのである。」⁹⁾ という農民称揚には、現

実の農民に対するリール自身の期待と願望がこめられている。しかし、リールの描き出す19世紀中頃の都市および農村の社会の様子は、すでに彼の時代には実在しないものであった。¹⁰⁾ 良質 (guter Art) な農民をより鮮明に描くためにリールは悪しき農民の例をあげ、土地を離れた労働者農民——南西ドイツの葡萄作地域に生じた農民プロレタリアート——の存在を非難した。19世紀中頃にみられるドイツ農民の変貌に対し、これを農民の荒廃と墮落ときめつけ、「癌のように広がる墮落の呪い」から農民を守るためには、商業的・工業的農業を退け、徹頭徹尾農民である「ドイツ農民」だけがその力と健全性を完全な形で保つことができると主張した。リールは理想とする農民像のイメージをさし示し、現実の農民の形態転化を糾弾したが、¹¹⁾ この時代には農村風景も、農業自体の变革——たとえば農地形態の効率化など——によって姿を変えていった。このような「大都市嫌い」や「農業ロマンチズム」という側面をもつ復興運動は、単に保守主義や防衛的性格が強調されがちであるが、その反面、非常に改革的であり、ときに解放的な視点をもっていた。たとえばドイツ農村福祉および郷土育成協会、民芸運動、郷土保護運動、生活改善と強く結びついた田園都市運動、青年運動などがあげられる。ベルクマン (1970) は、復興運動は、時代をこえて現れる文化ベシズムが愛国的保守的な政治ベシズムとまじりあっているものと定義している。このベシズムが復興運動の内容と中心となるものを決定し、その重要な結果として郷土 (Heimat) の発見があったというのである。¹²⁾ この郷土を対象とする郷土保護運動 (Heimatschutzbewegung) が、復興運動の最も大きな部分を占めていた。この郷土保護に関する戦後の批判的回想 (1956)¹³⁾ によると、その「郷土」の観念的図式には、二つのタイプがあり、一つは無邪気で楽観的な (naiv-optimistisch) だけのもの、他の一つは工業化時代の発展に対し、はじめからベシスチックな傾向をもち、これに対応するために愚直に過去の形態——たとえば19世紀前半のピーダーマイヤー等——を借りて擬装 (Verkleidung) するものをあげている。このベシズムは、近代化のもたらした価値観の他律的変換に対する不快感、大都市に形成された工業化社会が見通しのきかないものになっていることへの不安に根ざしている。復興 (Erneuerung) ということばは、刷新と復旧という意味を同時にもつ。刷新として、たとえば青年運動 (Jugendbewegung)¹⁴⁾ にみられるヴィルヘルム社会の旧態からの離脱や新しい価値観の創造を目指す新しい波がある。そしてもうひとつは、工業化時代において反工業化を唱える旧来からの勢力、すなわち保守主義の立場である。再びかちとろうとする自然的な存在 (natürliches Dasein) と素朴な生活 (einfaches Leben) の理想は、

リールら保守主義者の大都市と工業化に対する敵意の表明と奇妙に一致する点であった。すなわち「大都市嫌い」である。大都市に対する反感に根ざすことを特徴とする復興運動の少なくとも端緒は、こうした保守主義者の言説によって方向づけられていたといえよう。両者とも「静かでゆったりした生活」や「昔からよく知られた信頼のおけそうな関係」を農村に見出そうとしていた。農村は望ましい「原型」があるという幻想をもっていたからこそ、リールは自己の理想イメージに照らして農村の都市化を墮落と非難したのである。

(3) 郷土保護思想の萌芽

「郷土保護」(Heimatschutz) ということばは音楽家ルドルフによって19世紀末に考え出されたといわれているが、これが支持され運動として展開していく時代とはどのようなものであったのだろう。冒頭に述べたように19世紀後半は自然や社会が大きく変貌する時代であり、これに対抗する動きとして自然保護や歴史研究についての市民層の関心が高まった時代である。当時のドイツのブルジョアジーは読書会や同好会、研究会に所属するものが多く、たとえば民芸、郷土、歴史の会や美化協会、¹⁵⁾ 徒歩旅行の会などの団体が各地に組織されていた。ことに民俗学や歴史 (考古学を含む) に対する関心が高く、記念物保存の問題は、民俗学の領域で扱われていたのである。実はこうした民俗学や歴史に対する一般の関心の高まりが、19世紀前半にもあったのである。19世紀初頭に、ドイツ諸邦はナポレオン戦争によってフランスをはじめとする外国勢力の支配下におかれたが、それに対する祖国統一を望むナショナリズムが興った。こうした時代に民俗学への関心が高まり、民謡や、民話、童話、伝説、法や慣習、遺跡の調査や採取が行われた。これにかかわった人々のなかにゲーレスやロマン派のアルニム、ブレンターノ、グリム兄弟がいる。祖国や人民の存在を自ら問いなおす契機となったドイツ人としてのアイデンティティの危機に際して、郷土研究 (Lokalforschung) が一般の人々 (地方の医者や牧師、弁護士、商工業者等) にも広まっていった。¹⁶⁾ こうした自己及び自国の存在を自問する傾向は、同様に、19世紀末から今世紀にかけての「郷土」の発見の際にもみられたのである。「郷土保護」という語が考え出されやがて全ドイツ的な市民組織の運動として展開されることになるが、前述のように、当時の市民は一人一人ばらばらに孤立していたのではなく、何らかの団体に所属するものが多かった。市民で構成される諸団体はすでに組織され、それぞれの町や村ごとに設立されていた。こうした状況からみて郷土保護が市民運動として展開する下地はすでにつくられていたのではないだろうか。19世紀後半に体験した歴史上初の大規模な人口流動と大都市への人口集中は、再び人々にアイデンティティの確認を求め、再び民俗学や歴史への関

心を高めていった。郷土保護の運動のなかで頻繁に Volkstum (民族性) や Stamm (族) が用いられるのは、民族として他から固有であること、そして民族としての同胞的一体感を持つという願望があったからである。

3. ドイツ郷土保護連盟の設立

(1) ルドルフによる郷土保護思想

「郷土保護」ということばを考えたルドルフ (RUDOLFF, E.) は、1840年に法律の教師の息子としてベルリンに生まれた。ピアニスト、作曲家、音楽学校の教師であるルドルフは、1878年に風景の破壊に対する警告を投稿するが、これにはほとんど反響がなかったという。¹⁷⁾ 1880年にプロイセン年鑑に、『Über das Verhältnis des modernen Lebens zur Natur (自然と近代生活との関係について)』という論文を発表している。風景問題に強い関心を抱くようになったのは、毎年家族で過ごすことにしている地所の風景が、経済偏重の耕地整理のやりかたによって破壊されたことがきっかけであった。泡沫会社群生時代 (Gründerjahre) と呼ばれるこの時代は、利用できるものは何でも利用し尽くすという経済最優先の土地開発が盛んであり、風景の破壊に対して無策の状態であった。風景の保護のためにルドルフは土地の買い取りや老木の保護などを実践したという。また1897年に「郷土保護」ということばを彼の著書のなかにあきらかにしている。『Grenzboten』という文化政策の雑誌に掲載されたその論文は、小冊子として出版され、はじめの何年かはドイツ郷土保護連盟 (Deutscher Bund Heimatschutz) の最も重要な綱領であり、プロパガンダの書であった。¹⁸⁾ ルドルフは風景の破壊は人間の精神にも害を及ぼすと述べ、「国民の精神生活が貧しければ貧しいほど、その生活の外見は単調となっていく、またその逆もある。いやむしろそこにさらに大きな問題があるのだ。風習や民族衣装における特徴的なものが消えていくことは、単に精神的な貧困化の印にとどまらず、人々の階級身分の体面が消えていくことであり、身分上の喜びを捨て去ることを明らかに示すものである。」と主張している。¹⁹⁾ 約半世紀前のリールの発言に共通する身分 (Stand) に関するルドルフの保守主義的な立場をここに明らかにしている。ルドルフはこうした「文化的精神的没落」に対抗して枢密建築顧問官ホスフェルト (HOSSFELD, O.) と大学教授ミールケ (MIELKE, R.) とともに数多くの指導的文化人から署名を集め、1903年に郷土保護連盟結成の呼びかけを行った。²⁰⁾ そしてドイツ郷土保護連盟が1904年3月30日にドレスデンに設立されたのである。連盟は、ドイツ民族が無傷で清廉に保たれ、ドイツ国土がとりわけ無思慮な工業利用のために自然が破壊されたり広告物によって風景の悪化が生じたり

することがないように、記念物や自然の詩情によって国土が守られることを記念物保護に関連する課題としてドイツ各政府に要請した。目標の達成のために各地に協会を設立すること、会員は納入金額の多少にかかわらず平等であること、会員は連盟の利益のために個人的に活動したり、寄付をしたりすることがとりきめられ、さらに組織の面では、6つの専門分野がつくられた。

1. 記念物保存 建築家T.フィッシャー (シュトゥットガルト)
2. 伝統的な農家や町家の建築工法の保存 画家・作家P.シュルツェ＝ナウムブルク (ザーレック)
3. 廃墟を含めた風景の保護 フックス (フライブルク)
4. 原産の動・植物とその環境の保護 コンヴェンツ (ダンツィヒ)
5. 可動な物件である民芸 ブリンクマン (ハンブルク)
6. 慣習、風俗、祭礼および民俗衣装 博物館理事フランク (カウフボイレン)

(2) 連盟設立時の状況

19世紀末から今世紀初頭にかけて、ドイツにおいて郷土保護の関心がおこりつつあったが、実は他の国々においても同様な動きがみられる。イギリスではナショナルトラスト (National Trust for Places of Historic Interest or Natural Beauty) が19世紀末に誕生し、1900年頃にはフランス、ポーランド、スイスなどにも関連の団体が結成された。また郷土保護の国際会議も1909年にパリで開かれ、1912年にはシュトゥットガルト、1929年にはブレゲンツで開かれた。ドイツの郷土保護運動は、後に独自の展開をするが、当初は国際的な動向、すなわちヨーロッパ全土に広がる復興運動の潮流のなかにあった。

ドイツ郷土保護連盟の設立にあたって、主にどのような人物がかかわったのかをここで触れておく必要がある。郷土保護連盟が設立されて3年後に発行された百科事典 (Meyers Großes Konversations-Lexikon 1907. Heimatschutz の項) によれば上記のうちフックス (FUCHS, C.J.) はドイツの入植地建設に詳しい国民経済学者であり、コンヴェンツ (CONWENTZ, H.) はのちにプロイセン国立天然記念物保存局の設立 (1906年にダンツィヒに設立されるが、その後1910年にベルリンに移される) に貢献した植物学者である。そして連盟の会長にシュルツェ＝ナウムブルク (SCHULTZE-NAUMBURG, P., 1869～1949)、事務局長にミールケが就任し、連盟の活動が開始された。シュルツェ＝ナウムブルクは画家、建築家、作家としての才能に恵まれた人物であったが、当時はワイマール芸術大学の教授であっ

た。すでに『Kulturarbeiten』(1901年より執筆をはじめ。全9巻)の著作にとり組んでいたが、そのなかで彼は、不調和な建築物が文化景観をいかに壊してきたかを非難していた。一方、ルドルフは、前述のように連盟設立の前年、ミールケらとともに多数の当時の有力な文化人の署名をもって郷土保護の団体の結成を呼びかけている。今後の活動のプログラムの作成にあたって、ドイツ農村福祉及び郷土育成協会(Der Deutsche Verein für ländliche Wohlfahrts- und Heimatpflege; 1903)を設立したゾーンライ(SOHNREY, H., 1859~1948)がその準備段階で集中的に討議に参加したことや、同協会のバーデン支部長のフックス(上述の国民経済学者、フライブルク大学教授)も同様に準備段階で討議に加わっていたことをあげておく。連盟の事務局長となったミールケは、ゾーンライの活動の協力者であったが、ワイマル共和国時代に『ドイツ民族の植民論』の著作で有名になり、連盟の機関誌の編集を担当していた。またルドルフとも親交のあったミールケは、1907年のドイツ造園協会本大会において郷土保護と国土美化に関する提案をしている。さらに、ベルクマン(1907)によればドイツ農村福祉及び郷土育成協会のメンバーは、全員郷土保護連盟のメンバーでもあったという。このように異なる組織の間で人事的に重層するのは、世紀のかわり目の前後に集中しておきた「郷土」に関する諸運動に強いイデオロギー的関連と共通性が与えられたことや、事実、様々な方向で相互に関連する問題が同時に生じていたことによるものであろう。

4. 郷土保護連盟の活動

(1) 団体の加盟状況と郷土保護連盟の当初の活動

郷土保護連盟設立以前にも、ドイツ全体のなかで同様な目標をもついくつかの地方レベルの団体(たとえばバイエルンで1902年に結成されたもの)があったが、いわゆる市民運動的な性格のものではなく、役所の業務の一端としてあるいは博物館の支援をうけた専門家の手によるものもあった。しかし、前述のように多数の研究会や同好会などの市民団体がすでに全国各地で組織されており、これが郷土保護という国民運動の流れに呼応するポテンシャルをもつものであった。²¹⁾ 郷土保護連盟の設立以前から、関連のすべての団体の統合、各団体相互の調整や協力体制づくりは必須の課題であったが、これを成功に導いたのは、連盟の初代会長のシュルツェ=ナウムブルクの功績だといわれている。²²⁾ 34才で会長となったシュルツェ=ナウムブルクは著作等ですでに若くして有名であった。当時の彼の考え方を示すものとして Gartenkunst (1907)誌上で発表した自然美化に関する論文がある。内容は、人手の加わった自然の良さと自然風景における建築物の功罪について、対照的な写真・図を

用いて論評したものであった。当時としては非常に明解な手法を用いた斬新な文明批評的な内容をもつものであったが、こうした著作に特徴的な姿勢は、「長い間、ロマン主義ということばは、我々にとっては評判の悪いものであった。しかしロマン主義が美の認識の確かな部分を与えてくれたことを忘れない方がいい」というロマン主義(Romantik)への再評価であった。²³⁾ 同時代の青年運動は、かつてのロマン主義者のように、近代世界の対極としての中世を志向し、また産業社会の対極としての農民の生き方を称揚したが、こうしたロマン主義的傾向は、郷土保護運動にも共通していた。

1904年に郷土保護連盟が結成された後、とくに1910年前後に集中して各地に次々に郷土保護の団体がつくられた。1916年には、24団体に加わり、計250団体、個人会員976名となった(ザクセンでは1930年には4万人の会員、バーデンでは1934年には1万4000人の会員を擁する団体になったものがある)。郷土保護連盟の設立後、各地の団体の協力を得ながら啓蒙活動が展開され、10年後にはドイツ全土にわたって郷土関連の委員会や連盟(個々の団体でも連盟Bundという呼称を用いる場合がある)が組織された。そのほとんどは次第に数がしばられていき、多かれ少なかれ大きな郷土関連の団体に吸収編入されていった。こうした団体の組織の構成や活動の範囲は条件に応じてさまざまであり、プロイセンにおいても均一なものではまっただけでなかった。地方の団体はその土地ごとにまとまって自主管理をし、相互のめんどろをみていた。

こうした団体の活動内容は、記念物保存(Denkmalpflege)のほか、民俗学に関連するものであった。たとえば土地の方言や通りの名前、地名、河川名、さらに風俗習慣、祭り、遊び、歌、踊りなどの保存とその歴史を学ぶことなどである。一方、郷土保護連盟の設立以降、関連の分野の立法化が次々と進み、役所との接近もしくは協力の体勢がとられていった。1906年にはコンヴェンツのもとにプロイセン国立天然記念物保存局が設立され、さらに1907年にはプロイセンの景勝地保護法(Das preußische Gesetz gegen die Verunstaltung von Ortschaften und landschaftlich hervorragenden Gegenden)²⁴⁾、1908年の帝国鳥類保護法(Das Reichsvogelschutzgesetz)の制定に連盟が貢献している。実際、プロイセンの省庁は、「プロイセン都市計画法」や「プロイセン自然保護及び天然記念物法」の立案の段階で専門家としての意見を連盟等に求めているのである。

(2) 郷土保護運動に対する期待と批判

郷土保護運動を同時代の人はどうにみていたのだろうか。上記の天然記念物保存局ができた同じ年に出版された『Heimatschutz und Landschaftspflege(郷土保護と風景の育成)』で著書グラートマン(Grat-

MANN, E. ヴェルテンベルクの記念物保存管理官)は、郷土保護運動に対する批判と期待を述べている。コンヴェンツが文化景観を保護育成すべき天然記念物として非常に制限をつけて受け入れていたのに対し、グラートマンは、「自然美、とくに文化景観の保存と育成、そして風土の外見と内面の保存と育成」を郷土保護の課題として強調した。²⁵⁾ また当時の厳密な天然記念物保存の考え方(博物館型の保存といわれていた)に対し、グラートマンは「すべての自然をひとつの博物館あるいはひとつの園場に模様がえすることはできない。風景の育成は単に自然保護、今あるものの保存に甘んじるべきではなく、造園(Gartenkunst)や建築(Baukunst)と同様な創造的な芸術であるべきだ」と述べている。²⁶⁾ この風景の育成(Landschaftspflege)こそがグラートマンの著作の中心課題であり、その実現の可能性を郷土保護運動にみているのである。グラートマンは、広い意味で、人間がそこになにかを建てたときから風景の育成が始まると解釈していた。一方、彼は郷土保護の先駆として、18世紀後半の自然志向の庭園の出現をあげている。²⁷⁾ その点からいえば、あたかもグラートマンが自然賛美のロマン主義者であるかにみえるが、実は郷土保護からロマン主義的な動きを排除すべきだと同書の前書きで述べているのである。すなわち、郷土保護運動の興隆の背景にある、市民層のナイーブなロマンチズムこそ排除して、この運動が健全なリアリズムにもとづくべきであることを強調している。博物館型の硬直した保存の考えに対する批判やロマンチズムを排除して、健全なリアリズムを志向すべきだというグラートマンの指摘は、その後も郷土保護運動が自ら解決すべき問題として存在しつづけたのである。

(3) 戦時(第一次世界大戦)における郷土保護連盟の役割

1910年代は、第一次世界大戦(1914~1918)があり、戦後のドイツは共和国の時代となる。ここで戦前と戦中の郷土保護の活動について、ツーホルン(1954)の資料をもとに述べてみたい。²⁸⁾ 戦前は建物の保存や自然保護が最も緊急な課題とされていたようである。たとえばハイデルベルク城跡の保存事業や、架橋工事の促進、屋根のデザインや材質の問題(平屋根、ブリキ屋根の防止、茅葺屋根の保存)、都市や農村の風景の保存、蔓延する屋外広告への反対運動である。自然保護の分野では一般的な啓蒙活動のほか、ダム建設計画や水力利用に対する見解を表明すること(WalchenseeとIsarの発電所の件やLaufenburgの急流を救ったこと)²⁹⁾ や、運河工事にともなう問題、河川、湖沼など水の汚染に対する方策、耕地整理や開墾のいきすぎに対する抗議、採石による破壊からHohestoffelnを救ったこと、送電施設や変電所のデザインの提案、増えつづける登山鉄道とその影響に

対する見解の表明などである。そして第一次大戦中の郷土保護連盟の仕事は、金属接収時の記録保存であった。1917年に連盟の事務局は、教会の鐘の接収の際、これを選び出す前に撮影したり記録をとっていた。1916年の段階では真鍮製品の接収には対応できなかったが、その後の錫の接収のときには、連盟の事務局は、各地の団体に呼びかけ、新聞や雑誌に広告を出したり、あるいは独自に収集した。こうして集められたものを審査し、引き渡すことのできるものはスケッチや写真をとって、特色あるものの保存をすすめたとされている。さらに戦争及び戦後の状況は、郷土保護の分野に特殊な課題をもたらすことになった。それは墓碑及び墓地に関する仕事である。とくに戦士記念(Kriegerehrung)の事業計画では、連盟のメンバーが召集されている。というのは、役所の部局と芸術家が共通で墓碑・墓石の新旧の作品について評価や指摘をしながらそのデザインの基本方針を作成するという仕事にあたっていたが、連盟は以前からその世話役としてかかわっていたからである。戦争が始まるとプロイセン文化省と国防省は、郷土保護連盟に、ドイツ学識者芸術家文化連盟なる団体とともに、前線にいるすべてのドイツ軍の部隊のための戦士記念(すなわち戦死者の墓の仲介斡旋と記念事業の実施)のための連絡本部を設立することを任じたのである。一方、戦後の連盟においては、これまでの自然や文化価値の保護に加えてひとつの新しい役割が与えられた。東プロイセンの復興問題を通じて、古いものを守るだけでなく新しいものを創り出す立場を経験することになった。すなわち、これまでの模範的な典型となる農家や町家の保存だけではなく、近代的な必要性を考慮した復興の方策を提案する立場となったのである。こうした連盟の新たな路線の表明は建設行政や地区の建築家のための出版物となり、最終的には3巻からなる『都市および農村における建築の基本』という著作としてまとめられた。

(4) 諸団体との提携

郷土保護連盟は、支援を得るためにドイツ全土に組織網をもつドイツ都市会議(Der Deutsche Städtetag)や帝国都市連盟(Der Reichsstädtebund)などの団体と提携していったが、³⁰⁾ 他の組織との共同の活動(Mitarbeit)も積極的に行われた。たとえば1921年に国内外の諸都市において開かれた移動展「土木における良い造形」は、ドイツエンジニア協会(1836年設立)とドイツ工作連盟(1907年設立)及び郷土保護連盟との緊密な協力の成果であった。つづいて1923年「土木技術展」、1927年「技術のための建造物」(生産施設)という展覧会が開催された。1928年にはドイツエンジニア協会とミュンヘンのドイツ博物館と三者共同で技術文化財の保存のための共同研究グループを設立した。とりわけ、郷土保護と最も関係が深いのは記念物保存の分野であろう。

1917年以来郷土保護連盟は一年おきに記念物保存会議 (Tag für Denkmalpflege) に参加し、1922年から両方の年次総会を共同で開くことになり、同会議は記念物保存及び郷土保護会議 (Tag für Denkmalpflege und Heimatschutz) と改称した。そして、1924年から同会議の事務局が郷土保護連盟に移管された。1922年以来、両者間で共同の課題が討議されるようになる。たとえば、1922年では「水収支」について、1924年に「手工芸の技術の育成」、1925年に「都市の色彩の取扱い」、1926年に「ドイツ東部の植民と計画」、1928年に「古い都市と近世」である。一方、こうした記念物保存との協力体制に対してヴェストファーレンの連盟は、「記念物保存との連合によって博物館的な仕事にかたよってしまう危険を冒すことになるのではないかと批判している。³¹⁾ このヴェストファーレンの連盟は、郷土保護を単に芸術や文化の問題としてではなく、これを担い創造する人間の方が重要だという認識に立っていた。³²⁾

(5) 郷土保護連盟と役所との結びつき

郷土保護連盟は上述のように記念物保存の分野との関係は緊密であったが、役所などの公的機関との結びつきも強かった。郷土保護連盟の歴代の会長のなかには国務大臣や地方長官の経験者がいたが、長い間連盟の事務局長を務めたリントナー (LINDNER, W.) は早い時期から、有力な役所の部局、すなわち帝国内務省や、プロイセン科学芸術教育省、プロイセン国民福祉省、とくに国立天然記念物保存局と緊密な接触をもっていた。ツーホルン (1954) は、郷土保護連盟と役所との結びつきが強化されることの利点について「連盟がボランティアで名誉職的に事業を行うことは、役所の (行政的な) 命令でやるよりはいいことだ」と評しているが、³³⁾ 実際、第一次大戦前後に連盟独自の機関誌が出せない状況下にあっても、『Denkmalpflege und Heimatschutz (記念物保存と郷土保護)』や『Denkmalpflege (記念物保存)』という amtlich (お役所的) な雑誌に連盟が意見表明の場をもっていたことから、両者との結びつきの強さがうかがわれる。前述のドイツ都市会議などと連盟が協力関係を結ぶことは、全ドイツ的な運動のネットワーク化を進めると同時に、全国の地方自治体と関係を緊密にしようとするものであった。連盟のこうした姿勢には、組織的かつ政治的により大きな力を得たいという動機が根本にあったであろう。事実、連盟の力によって立法化、制度化が促進されていった。しかしまた逆に郷土保護の主な活動である自然的、芸術的記念物の保護が、次々に国家的な部局の課題になっていくにしたがって、郷土保護団体の活動の場が減少することにもなった。³⁴⁾

(6) 郷土保護と博物館運動

何故、記念物保存が国民的規模でさかんになったかについてここでふれておきたい。郷土保護思想の普及は雑

誌や本などのほかに、郷土博物館によるものがあった。郷土博物館は国や自治体によって設立されたり、ところによっては民間団体の郷土連盟や協会によって、多数設置された。当初は、17～18世紀の領主の骨董品陳列室のようなものであったが、こうした博物館は1923年以降、地方の大きな博物館連合に統合され、大きな博物館の管理下にはいることになるのである。³⁵⁾ 郷土保護思想が世間に広く受け入れられたことについてツーホルン (1954) は「地方の団体が十分に準備した請願書をもっていけば、ほとんどいつも役所の部局からの支援が期待できた」と述べている。³⁶⁾ 当時の記念物の価値は、絶対的なものではなく相対的なものだという認識が普及していた。こうした記念物についての考え方が示されている興味深い発言 (1936) がある。「…それは田舎の小さな村にとって、質素だが、なにか特別な価値があるのかもしれない。なぜならば、それは郷土意識と同族意識を強化し、生きることに必要な力を発揮するのだ。それは記念物保存がもつ生き生きとさせる効果だ。フランスのように保護のための “classment” で一定の数の記念物を認めようというのではないのである。」³⁷⁾ 地域固有の価値を重視する記念物の考え方は、ローカルな文化的価値の多様性を認めようというものであり、身近なものの日常的なものの価値への再確認を促すものであった。

(7) 連盟設立四半世紀後の郷土保護運動の変貌

郷土保護運動の展開を概観すると、ルドルフが案出したという「郷土保護」という術語は、連盟が設立されて四半世紀がたつうちに、自然や歴史的な遺産を保護救済することに関する集合概念 (Sammelbegriff) となってしまう。当初は、郷土保護は多分に情緒的なものであったが、ツーホルン (1954) によると、アヴェナリウス³⁸⁾の影響下で、表現文化 (Ausdruckskultur) の推進へとかわっていったという。すなわち一定の表現はすべての外観つまりその姿をなさしむる生活の状況のあらわれであるとする認識は、形態 (Form) と内容 (Inhalt) との一致を求めるものとなっていった。³⁹⁾ 現実の生活の姿を見ずえること、そしてそれから生まれるべき形態の追及という視点は、単に永続性のある価値を保存維持するという方向のほかに、根本的に新しくかつ良いものを創造しようとする動きを生んだ。ドイツ工作連盟 (1907年設立) が、工業製品の質的な向上をめざしたことはよく知られているが、これと並行して郷土保護連盟は新たな応用芸術 (angewandte Kunst) への道を探っていた。すなわち、郷土芸術 (Heimatkunst) のせまい枠を越えて、モダンと伝統、インターナショナルとドイツ固有のものとの堅実な妥協というひとつの芸術の誕生が、郷土保護思想の担い手たちの間でイメージされていた。⁴⁰⁾ 郷土保護の一部は19世紀の歴史様式や民俗芸術の形式主義から脱離を促し、創造的な力を発揮させる役

割を担った。また郷土保護連盟は、活動の方針について、これまでの記念物保存を中心とするものからの転換をはかりはじめていた。

5. 郷土保護から郷土育成へ

(1) 郷土保護に対する世間の評価と協力者問題

1920年代後半に、郷土保護連盟は、組織化された運動団体にはつきものの問題を抱えていた。すなわち協力者問題である。連盟自体の活動方針の変化や新たに加わる賛同者の増加によって問題は次第に深刻化していった。シュルツェ＝ナウムブルクは、「郷土（ハイマート）」ということばはセンチメンタルな響きがあって、安易にとられやすい。この運動の本来の意味にあわない。保護すべきは、狭義の郷土のみではなく、わが国全体をはっきりとイメージできる象徴的存在なのだ⁴¹⁾として、1927年に郷土保護という呼称は十分ではないと批判している。この呼称が世間の誤解をもたらし、あらゆる混乱のもととなっていたのだろうか。詩人ブッセ（BUSSE, Hermann Eris, 1930）は、郷土保護に対する協力者の“困った行い”について次のように批判している。「郷土は商人やおしゃべり、にせ詩人、まやかしのもの舞台として、残念ながら今なお多くの人々を夢中にさせるところとなっている。—— 中略 —— 郷土について根拠もなくうわついた甘美なことばで多くが語られすぎてきたし、今でもそうである。自分のやっていることもよくわからぬものが、一生懸命郷土の将来を考えようとも、ロマンチックに演出されたおふざけ（romantisierender Getändel）ではどうにもならない。」⁴²⁾ 時代錯誤、骨董趣味、自然耽美を非難し、伝承というものがいつも無条件にお手本を差し出してくるわけではないことを説き、近代の発達——とくに技術——とそれにとまなう社会の変化を前向きにとらえていこうとする人々が、郷土保護運動のなかから出てきた。

(2) 郷土育成の担い手としての Volk の育成

郷土の「保護」から「育成」への転換の傾向が、連盟の25周年記念につくられた『Der Deutsche Heimatschutz, ein Rückblick und Ausblick（ドイツ郷土保護の回顧と展望）』に明らかに認められる。これまでの郷土保護の目標設定に対する批判として「守るべきものは何か、救うべきものは何かという連盟の発足当時の主題とは異なる郷土育成を論拠とする概念が新しく選別され、明確となった。つまりこれまでの郷土保護の目標設定が単に感情的な要件である“古さ”ゆえに評価されるべきだとか、保護されるべきだという、あるいは何ものにもかえがたい“手つかずの自然”などという環境の変化に対して盲目であった」⁴³⁾ことがあげられよう。しかしその「育成」についての解釈にも相異があった。かつて同じ会報（Mitteilungsblatt, 1925）に連盟の綱

領に関わる重要論文を書いたといわれるシュルツェ＝ナウムブルクとヴァーゲンフェルト（WAGENFELD, K., 1869～1939）においても、「育成」の考え方に大きな隔たりがある。両者は共に「郷土」の担い手は人間であることを強調するが、シュルツェ＝ナウムブルクは民族における“大衆（Masse）”を反文化的であると否定している。一方、ヴァーゲンフェルトは、彼らこそ真の郷土に憧れているのであり、文化価値や自然美に盲目なのは、彼らは文化の“相続人”にされていないからだとしている。「穴ぐらのような安アパートに生まれ、大都会の路上や煙突の林立するばた山の間に育ち、毎日毎日、工場や鉱山の立坑のなかで歯車のきしむ音を聞きながら生きのびようともがく彼らはドイツの風景の魔力、すなわち祖国の自然的歴史的な美をまったく知りもしないのである。ドイツの自然や文化財の存在を味わい楽しむことから締め出され、彼らは自らの郷土のなかで疎外されているのだ。」⁴⁴⁾

端的に言えば、シュルツェ＝ナウムブルクは、文化の担い手として望ましくないものは切り捨てたが、⁴⁵⁾ ヴァーゲンフェルトは、逆にその担い手こそ Volk（国民、民族）であるとして、大衆に郷土や種族（Stamm）の歴史や同じ人種としての同族意識を得させるための国民教育の必要性を説いた。⁴⁶⁾ 1930年にヴァーゲンフェルトは次のように述べている。

「あまりに長い間、郷土保護や郷土育成は“教養人”の領分であった。そして長い間にわたって我々は、郷土の保護や育成をもっぱら、芸術や自然という分野に追いやっていった。しかし、すべての郷土の美の上に郷土の人間が立っているのだ。もし我々が—— いままでないがしろにしてきた—— Volk としての価値を認めたいと思うならば、Volk は郷土の守り手、それは単に郷土の価値の守り手ではなく、ドイツの本質を守護するものにちがいない。しかしこれまで通りならば、郷土保護も郷土育成もただのつぎはぎ細工にすぎない。」⁴⁷⁾

ヴァーゲンフェルトは、方言詩人として後に名を残す人であったが、新しい郷土保護運動の中心的な指導者であった。彼は、ヴェストファーレンの民族性の保持と育成のためにヴェストファーレン郷土保護委員会（Westfälische Kommission für Heimatschutz）を改組してその目的も明確にした郷土連盟（Heimatsbund）にする考えを1913年にすでに表明している。彼は若い頃に工業地帯で教師をしていたが、そこで労働者問題ことに民族問題に直面する体験を得る。ヴァーゲンフェルトはその体験からある確信に至る。すなわち、文化価値の保存だけを目標とする郷土保護では、時代の最も重要な関心事を見逃すことになる。なぜならば文化は民族性豊かな土壌なしに生きることができない。このままでは郷土保護が文化から命を奪ってしまうのではないかと危惧し

ていたのである。一方、学校で行われている教育について「ギリシャ・ローマ時代やパンツ、ホッテントットよりドイツの民族、人種、血統、ドイツの伝説、童話、民謡、慣習について教えることがずっと少ない」⁴⁸⁾として、学校の枠内での教育に不満をもっていた。ルールやエムシャーでは、石炭や鉄に資本が殺到した結果、いわゆる「別種の民族性の侵入」によって「風土に即した文化が危機にさらされる」という問題——当時のドイツ国境付近でも同様だった——が生じていた。ヴェストファーレンは、この時代で最も工業化が進み、「郷土」の危機をめぐるさし迫った問題をかかえていた地域のひとつであった。このことが郷土保護は民族性の保持の問題であるという確信を得させ、従来の郷土保護の考え方を厳しく批判し、新たな概念を生みださせる契機となった。戦争に続いて、内政変革の時代を迎える。「郷土や祖国では今や全世界の文化があふれ出し、民族性や血統 (Stammesart) は、時代の虫に喰いあらされ、国際主義の浮沈によってペテンにかけられ、没落の儀式が行われる時代であった。」とヴァーゲンフェルト (1926) は述べている。⁴⁹⁾ こうした状況下、郷土学は様々な必要性に応じた新しい教育の方法で始められていた。静かに自分の楽しみのためにやっている郷土学者や職業的な研究者の他に、教育者とはいわないまでも、人間形成にあずかるものとしての郷土育成者 (Heimatspfleger) が現れなければならないとヴァーゲンフェルトは感じていた。その結果、専門の科学的な領域と記念物保存的な研究のための教育的な郷土育成をめざす組織として、1920年代の終わりにヴェストファーレン郷土連盟 (Westfälischer Heimatbund) が結成されたのである。⁵⁰⁾ 研究結果を同連盟の教育方法に有効にとり込むために、専門的な調査や記念物保存は地元の記念物課に完全に委ねる方法をとった。こうした教育活動は、調査面で新たな課題を生んだが、他方、活動をより活性化させる刺激ともなった。郷土連盟は、ヴェストファーレン語辞典やドイツ民族地図の作成、河川名や民謡の研究などを推進した。その他、ヴェストファーレンでは自治体の協力を得ながら、郷土連盟がこれまで育成あるいは設立させた各種委員会をひとつの地方研究所 (Provinzialinstitut für westfälische Landes- und Volkskunde) へと統合したのである。ここにヴェストファーレンの領域についての学問的研究が、組織・財政面で実質的に強化され、同時に郷土育成により広汎な学問的基盤を確保されることになった。この研究所ではとくに成人教育における自然や歴史の特質についての新しい教育方法の開発が行われたのである。同じような研究所や研究施設は他の地域にもみられる。たとえばボンやマールブルク、インスブルックの大学またはハノーファーの地方研究所 (Provinzialinstitut für Landesplanung und niedersächsische Landes- und

Volksforschung) があげられる。しかしこれらはヴェストファーレンの研究所と異なった生成過程を経て設立されたものである。⁵¹⁾

郷土育成における教育問題については、もう一人の人物について触れておく必要がある。ゾーンライは、ヴァーゲンフェルトと同様に工業地帯で教師をしていた経験がある。ヴァーゲンフェルトに対してゾーンライは、学校での教育を期待していた。1890年代の半ばより郷土育成の実践に新しい方法を示したといわれるゾーンライは、1896年に「農村福祉委員会」を設立、⁵²⁾ これが1903年に「ドイツ農村福祉及び郷土育成協会」となった。ゾーンライは、ドイツの民族性の最も重要な担い手は農民であるという認識に立ち、農民層の生活環境全体を育成し、再興することをめざしていた。自ら創刊した雑誌『Kleine (seit 1901 : Deutsche) Dorf-Zeitung』(1898～1918) や『Dorf-Kalender』(1902～1932) で民芸や祝祭や昔からの子どもの遊び、民謡の育成を奨励し、村の年代記や村の博物館の施設を有効に用いて郷土意識を高めることを課題として示し、これはまず第一に学校の教育を通じて実践されねばならないと考えていた。ツーホルン (1954) によれば、ゾーンライの最初の影響があらわれたのはハノーファー地方であるという。最初の団体はニーダーザクセン郷土連盟であり、その会則には郷土保護のほかに、自らの課題として、「精神生活を豊かにし、ニーダーザクセンの血統の育成による郷土愛の実践活動」を定めている。⁵³⁾ ゾーンライは、育成の対象とする農民とその生活環境をどのようにみていたのだろう。「原則的にゾーンライは、農村の現状を安定しているゆえに良いもの有利なものと感じている。現状を守るというのではないとすれば、それを再生するということなのか？しかし、月並みな農村の形成とか改革は最終的にはどのようなものにすべきなのか？ハインリヒ・ゾーンライのグループの目的は何だったのか？」と問いかけるベルクマン (1970) は、「その目的は、いわゆる“古き良き時代”への回顧や農業ロマンチズムの思想にもとづく田舎風に様式化された理想の実現である。それは大都市からまったく切り離され、孤立していて、完全に独自の存在領域としてのものであり、大都市の外に、心をなごませる田舎風の何かをつくりあげること」をめざしていたのではないかと結論している。⁵⁴⁾ ドイツ農村福祉及び郷土育成協会の設立の主旨は、あらゆる文化・習慣から疎外された人々をどのように救うべきかであった。そして彼の農村賛美は、田園生活をロマンチックにかつポエチックに神々しくすること、すなわち農村の生活を牧歌的に理想化 (Idyllisierung) することを目標としていた。この実現こそが、農民の離村 (Landflucht) を防ぎ、農村を守ることと考えた。⁵⁵⁾ こうした見解を啓蒙する相手は、単に農村の中産階級やその他の村民だけ

ではなく、むしろ都市に住むブルジョアジーであったという。その目的は後者の大部分、すなわち都市に住む人々を農村（Land）と精神的に結びつけ、潜在的なきずなを強調することであった。^{56）} 農業の構造危機の排除についての実現可能な提案はせずに、“意識”をかえることがゾーンライにとってはより重要だったのだろう。しかし、実際は、農村の発展変貌がもたらす問題——たとえばさせまった農業危機の解決や社会経済の変化に対して精神的にどうあわせていくかの問題——においては、牧師や教師、農業関係の官僚や改革的な農業者で構成される団体は、強大な利益団体たる農業者同盟（BdL）に圧倒されていた。^{57）}

郷土を保護するには、郷土を支える人々の育成教育からという意味で、郷土保護運動と教育問題に接点が生まれた。本論におけるゾーンライとヴァーゲンフェルトについての記述はあくまでもその全体像の一部分にすぎない。またこの接点については、近代における教育史の面からもより深く考察する必要がある。ただここで指摘しなければならないことは、社会状況の激変に対応するように短期的かつ集中的に推進されたHeimat（郷土）とVolk に対する手だてである。今世紀初頭からの四半世紀の間に郷土保護は郷土育成へと変わり、その対象はHeimat から Volk へと重点が移っていった。郷土連盟の団体組織は、郷土学の知識の集積の場となり、関連分野（博物学、自然保護、地理地誌学、民族学、歴史、書誌、郷土保護、建築保存）の欠くべからざる交流の場としての役割をもっていた。しかし、やがてあらゆる学校の教師は、当局の告示（behördliche Erlasse）により、郷土学にもとづく授業を義務づけられ、これまでのように必要な教材をいつでも使ったり、独自に知識を修得することができなくなってしまったという。ツーホルン（1954）によれば、この教育方針を進めるための準備があまりにも簡単であったため、多かれ少なかれ、郷土学は細目にこだわってなかなか進まず、とくにドイツ人の生活空間に全般に対する視点には立てないものとなっていた。^{58）}

(3) ナチスの文化政策にみる“郷土”

郷土育成の新しいありかたについて討議されていた郷土保護連盟の年次総会は、個人的な思想や見聞を交換する場として重要かつ非常に影響力をもつものであった。1933年にナチスの最高幹部は、ドイツ郷土保護連盟を獲得するために、全体主義的な文化政策の要求をもって、連盟の年次総会において論戦してきた。ツーホルン（1954）は「郷土運動のなかで、民族性、血統、郷土などの概念が、『Blut und Boden（血と土）』のスローガンのなかに、手ぎわよくまるめ込まれてしまったのだ。人の言うことをすぐ信じてしまう人はもちろん分別のある郷土を愛する人でさえそうだったのである。そしてこ

うした世界観に立つことが郷土育成の視点から必要だとますます容易に思い込むようになっていった。」と当時を述懐している。^{59）}

この時代には、ナチスはあらゆる文化政策を掌握するために、文化団体のみならず学問・芸術分野のさまざまな教育施設や制度に介入し、弾圧していった。たとえば、当時デッサウにあった美術工芸学校パウハウス^{60）}の解散についての動議が1932年の1月に市議会で、ナチスの議員から提出され、さらにナチスの代表者によるパウハウスの視察がその年の7月に行われた。その視察団のなかに、ナチスの文化政策に同調していた国家社会主義的な芸術理論家であり、ドイツ郷土保護連盟の初代会長であったシュルツェ＝ナウムブルクがいた。勢力を増大しつつあるナチスは、パウハウスを「ユダヤ＝マルクス主義的『芸術』意志の最も著名な拠点の一つ」として狂信的な憎悪をいだいていたが、同年10月にバスハウスの教育活動は停止され、学校は閉鎖されたのである。ナチスがこの学校の消滅を願った主な理由は、パウハウスを国際主義の根城、そしてユダヤ人の巣窟とみなしていたことであった。先の視察団の報告に、この美術工芸学校の跡地の利用について次のような記述がある。「まもなく全体が取りこわされ、現在デッサウの民衆が俗に水族館と称している東洋趣味の味気ないガラス宮殿の立っている所に、やがてドイツ国民に故郷と保養を提供する庭つきの住宅か公園が出来ることを願いたい。」^{61）} ガラスの宮殿とは、パウハウスの創始者グローピウスの設計した校舎である。そのシンボルの取りのぞかれたあとに、ドイツ国民（Volk）のための郷土（Heimat）を用意しようということ、すなわち、新生ドイツ国民のためにナチスの理想郷を建設しようというものであった。

6. おわりに

ドイツの郷土保護運動については、これまでその存在は知られていたが、組織や活動の詳細は明らかにされてこなかったと思われる。本論は、第二次世界大戦後にまとめられたドイツ郷土保護連盟設立50周年記念の論文集におけるツーホルン（1954）の論文をクリティカルにみることで、郷土保護運動の組織や活動をより具体的に明らかにしようとしたものである。本論は1920年代までの活動を中心に述べたものであり、郷土保護運動の全体像を明らかにするまでには至っていない。ここで明らかにしておきたいのは、筆者は、郷土保護運動がすべてア priori にナチズムのために成長発展してきたという見方はしていない。ただナチス新体制が、比較的いきのいい国民的な運動体を欲していたこと、そして運動体の原動力としてナチスの力を得ようとする人々がいたことは確かである。1930年代以降の郷土運動とナチズムとの関係は、それだけで一つの大きなテーマとなりうると考える。

他稿に譲りたい。

本論の結びとして、要点を次に列記しておく。

(1) ドイツ郷土保護連盟の設立から四半世紀間の活動にみる組織と目標設定の変遷

1904年に郷土保護連盟が設立されて以来、啓蒙活動が展開され、10年後にはドイツ全土にわたって郷土関連の委員会や連盟が組織されたという。大小さまざまな団体は、やがて大きな団体に吸収編入される傾向をみせるが、団体の組織や活動は、それぞれ条件に応じて異なり、プロイセンにおいても、均一なものではなかった。当初の郷土保護は、情緒的な性格が強く、主要な活動は、自然的文化的な記念物の保存に関するものであったが、保存に関する法案の立法化を促進させる役割を果たし、1906年にはプロイセンにおいて国立天然記念物保存局の形成をみるに至る。連盟の設立25年後には、ルドルフの案出した「郷土保護」ということばは、「祖国の自然や歴史的な文化遺産を救済したり、保存すること」に関する集合概念となってしまったが、こうした分野が、国家的な部局の課題となることで、市民組織としてなすべきことが減ったことや、郷土保護連盟の従来の記念物保存に偏重する目標設定が批判されるにつれ、これまでの郷土保護から郷土育成へという活動方針の転換がせまられていた。

(2) 記念物保存と博物館運動

郷土保護の考え方が出る前には、記念物保存の分野が歴史的遺産の保存に関するものをカバーしていた。記念物保存は、民族学の分野で長年扱われてきたものであり、学者や専門家を擁した市民組織の研究会などがすでにあった。記念物に対する考え方がヒエラルキッシュな価値体系をめざすものではなく、地域固有の価値を重視する“相対主義”であったため、郷土研究やローカルな博物館運動を振興することにもなった。地域に固有で大切なものと認められれば“御墨付き”がすぐもらえる構造は、調査認定の方法で問題を残したが、郷土意識を高めたことと記念物保存を国民運動化することに貢献したといえよう。

(3) 郷土保護運動の官製化

郷土保護連盟は、早い時期から有力な役所の部局と積極的に接触したり、ドイツ都市連盟・帝国都市連盟と提携するなど、組織は官製化の方向をとっていた。官製化が一層進んだのは、第一次世界大戦の際の金属接収以来ではないだろうか。接収されるものの記録保存が目的だったというが、自ら進んで金属のあるところ（古い鐘をもつ教会）を探しまわったり、広告で金属供出を呼びかけることで、国民の先頭にたって国家事業に直接協力する役割を演じたのである。そして戦時の重要な仕事として戦死した兵士のための墓の仲介斡旋と記念事業の世話をする役割が国家より任じられた。市民組織の団体が、よ

かれ悪しかれ、“おかみの御先棒をかつぐ”瞬間は、国家と国民が直接手をつなぐ瞬間である。国家の事業の一翼を担うことの“晴れがましい”体験に、金属の一片をもって国民誰もが参加できたのである。こうしたセレモニアルな事業を率先してとりおこなうことによって、郷土保護運動に対する国民的規模の支持が増大していったと考えられる。上から認められ、下からの支持が厚い国民運動の組織を、勢力を増大しつつあったナチスは文化政策上の観点から手中におさめようとしていたのである。

(4) 郷土育成と民族性の問題

19世紀末における農村人口の流動的な部分を、すでにゾーンライは革命勢力の予備軍とみていた。すなわち農民が郷土を「喪失」して、他の農村あるいは都市への人口移動が激化したが、こうした現象がひきおこす社会不安に対する懸念・恐怖がここに表現されている。当初の郷土保護運動は、農・工業の近代化がもたらした郷土風景の破壊に抗議し、昔ながらの文化を救済する活動が主であったが、後に郷土を保護することだけでなく、積極的に育成すべきであることが主張されるようになった。しかし郷土の何を育成するのかで考え方の相異がみられる。

ここに郷土を支えるものとして大衆を育成すべしというヴァーゲンフェルトと、これを否定するシュルツェ＝ナウムブルクの両者を例にあげてみる。シュルツェ＝ナウムブルクはドイツ民族の成員の純度を高めるためには劣ったものや少数のものを切り捨てるべきだと考えていた。一方、ヴァーゲンフェルトは大衆こそ郷土を担う原動力とみていたが、注意しなければならないことは、大衆といっても、ドイツ民族に限定していたことである。すでに19世紀末においてウェーバーが訴えているように、郷土の危機が叫ばれる大きな原因のひとつに、工業労働者や農業労働者として近隣諸国から流入してくる異民族に対する恐れがあった。すなわち、ドイツ固有の民族性が脅威にさらされているという恐怖感に根ざす民族主義的反動である。ヴァーゲンフェルトは、異民族が流入してくる工業地帯においてドイツ人大衆の育成を主張したが、そのねらいは何だったのだろうか。リールが19世紀中頃の農民像を称揚し、農民を保守主義の防波堤に見立てたように、ヴァーゲンフェルトは大衆を鍛えなおして、これを民族性の保持のための防波堤にすえようと考えたのだろうか。ともあれ、ヴァーゲンフェルトは、自然・文化の保護という郷土保護のこれまでの路線を否定し、明確に人種問題、血統の問題という見解を示している。郷土の保護から育成への転換はその対象を——端的に言えば——モノからヒトへ切り換えることを意味するものであった。つまり、積極的に育成すべき対象は、郷土と民族性の担い手たる人間にふりむけられたのである。

(5) ハイマート（郷土）のイデオロギー性

生まれ故郷を離れ、労働者として大都市に流入してきた多くの人々が、失われた郷土を返せとか、現実に住んでいる街区を“ふるさと”と呼べる環境にしてくれと自ら要求することから郷土育成（保護）が始まったのではない。郷土の危機を憂う人々がその必要を説き、理想となる生活空間としてのハイマートを語り、期待される民衆像を構想することになる。すなわち、郷土を失った当人は運動の主人公にすえられるが、この運動の主体ではない点に留意しなければならない。恵まれぬ境遇にいとみなされている現実の民衆は、これから創出される“期待される民族像”のさしずめ原材料という位置づけだったであろう。憂うべき現実の悲願にある目標にハイマートがあった。望ましいハイマート像を描くこと、それを説き普及をはかること自体、本質的にイデオロギッシュである。郷土育成をめざすイデオログにとっての第一の目標は、民衆の育成であった。無知で物いわぬ（と想定された）民衆をどのように啓蒙し、訓育教化するかが課題であったが、そのために理想となるハイマート像としてさまざまな農民像（Bauerntumsidologie）や農業ロマンチズム（Agrarromantik）が描かれた。これらは一般的な政治的綱領のような抽象度の高いものではなく、むしろ日常の生活規範に関するもの（人生訓のようなものから、理想の農民像や国民はこうあるべきだ等）であった。傾向として啓蒙的、教育的であり、そしてドグマティックで、個人主義に対して否定的な（すなわち個人としての生き方を認めない）性格をもっていた。重要な点は、民衆もしくは民族の生活規範に大きく立ち入った文化指針のようなものが、形成されていったことである。これが後にナチスの文化政策に吸収されることになる。1930年代から40年代にかけて、ナチスの文化政策が具体的に形をとまって表れてくるが、その実際の生活空間のつくり手——まさにハイマートを創出する人——として数々の建築家や造園家が登場することになるのである。本来、ハイマートは自己の生まれ故郷あるいは育ったところ、なじみのある場所という個別的な意味をもつ。しかし民族主義的な意味が強調されることによってドイツ民族のふるさとという意味をもつようになる。すなわち、ハイマートはドイツ人だけのふるさと、ドイツ民族から成る国家と読みかえられることになるのである。

（1991.2.15仮受付，1991.12.13受付）

引用文献及び註

- 1) JÄGER, H.(1873): Ueber Landesverschönerung: Monatsschrift des Vereins zur Beförderung des Gartenbaues in den königlich-preussischen Staaten, Berlin, 32

- 2) 赤坂 信(1987): ドイツにおける19世紀後半の国土美化の衰退と郷土保護運動の影響: 造園雑誌50(5), 54~59及び赤坂 信(1988): 19世紀後半のドイツにおける農村風景の保護の問題とその社会的背景: 造園学会関東支部大会研究報告発表要旨 6号, 49~50 参照

- 3) ウェーバー, M., 山口和男訳(1959): 農業労働制度, 社会科学ゼミナール, 未来社, 19
4) 人口流動がひきおこす社会不安と農業労働者問題に関する1890年代の論評を次にあげる。

ゾーンライが著した『農村からの人口移動と社会革命(1894)』では、農村から都市への人口流出に対する憂慮がくりかえされている。農民が離村し、都市プロレタリアートに「転落」し、革命的精神に「伝染」する状況を示しながら、「時代の流れを理解するものは、農村からの人口移動を社会革命への動き、または死への行進と判じることができる」としている。この時代の保守層の抱くひとつの大きな不安は、革命勢力の増大であった。またゾーンライは、社会民主主義者は、農村からの人口移動の意味をよく自覚し、「工業へと流入する東部からのドイツ人労働者をすべて(党)の組織でうけ入れて」、この機会に革命勢力の増大を企図していると述べている。

SOHNREY, H. (1894): Der Zug vom Lande und die soziale Revolution: Verlag von Reinhold Werther, VIII~IX

マックス・ウェーバー(1893)によれば、農業労働者の調査は雇用主側だけについて行われたもので議論され、社会政策学会のような機関においても、労働者自身を調査することが一度も提案されなかったという。そこでマックス・ウェーバーらは、調査票を作成し、福音社会会議(Der evangelisch-soziale Kongress)の手で調査が実施された。こうした調査票はドイツ福音派牧師が配布・回収したが、労働者に接近しようとした牧師には社会民主主義者のレッテルがはられたとしている。ここに農業労働者問題がいかにタブー視されていたかをうかがうことができる。(ウェーバー, M.: 前掲, 9~10)

- 5) BERGMANN, K.(1970): Agrarromantik und Großstadtfeindschaft: Marburger Abhandlungen zur Politischen Wissenschaft, Herausgegeben von E. ABENDROTH, Bd.20, 18
6) PFEIL, E.(1972, 2.Aufl.): Großstadtfor-schung — Entwicklung und gegenwärtiger Stand —: Gebrüder Jänecke Verlag, Hannover, 125
7) ウェーバー: 前掲, 29, 35~37
8) 斎藤幸雄(1974): ドイツ農業政策と農業者同盟(1810

- ～1914) : 経済学研究25(2), 59～66
- 9) ハウスホーファー, H., 三好正喜・祖田修訳(1973) : 近代ドイツ農業史 : 未来社, 131～132
RIEHL, W.H. (1856, 4.Aufl.) : Die Naturgeschichte des Volkes als Grundlage als einer Deutschen Sozial-Politik, Die bürgerliche Gesellschaft, 41ff. 参照
- 10) Akademie für Raumforschung und Landesplanung(1970) : Handwörterbuch der Raumforschung und Raumordnung : Gebrüder Jänecke Verlag, 「Riehl, Wilhelm Heinrich」の項より
- 11) 郷土保護連盟の第2代会長の国務大臣FEILITSCHはリールを「郷土保護運動の父」と呼んでいた。(BERGMANN : 前掲, 132)
- 12) BERGMANN : 前掲, 88
- 13) HEUSS, T. : LIENENKÄMPER, W. (1956) 著の Schützt die Natur pflegt die Landschaft の緒言 Über „Heimat“-und „Natur“-Schutz より
- 14) 青年運動は、農村からおこったものではない。都市、とりわけドイツとオーストリアの大都市で大きくなったものであり、大都市文化の制約をうけていた。心理的にも社会的にも、高等学校に在籍している中産階級の青少年の枠に縛られていた。
ラカー, W., 西村稔訳(1985) : ドイツ青年運動—ワンダーフォーゲルからナチズムへ—, 人文書院, 265 ; 原著 LAQUEUR W.(1962) : Die Deutsche Jugendbewegung, eine historische Studie, Verlag Wissenschaft und Politik, 253
ラカー (1962) は青年運動の長所と短所について次のように述べている。「運動は一つの人格像を生み出した。メンバーの青年男女は、率直さ、品位、うちとけた態度、理想主義といった資質を育み、みずばらしいエゴイズムや立身出世主義から自由になろうとし、とってつけたようなしきたり、俗物根性、気どりに齒向かった。」青年運動のおもな欠陥は、支離滅裂の思考、社会的な勇気と責任感の不足、根強い反自由主義的な考え方であった。運動はかつてのロマン主義者と同じく、近代世界の対極として中世をうやまい、産業社会に対して農民の生き方をもち上げる傾向があり、ついには目の前の現実とかかわることさえできなくなった。」ラカー : 前掲, 271 (原著259～260)
- 15) 赤坂 信(1987) : ドイツの国土美化運動における美化協会の功罪 : 造園雑誌50(4), 256～257, 265
- 16) ZUHORN, K. (1954) : 50 Jahre Deutscher Heimatschutz und Deutsche Heimatpflege — Rückblick und Ausblick — : 50 Jahre Deutscher Heimatbund, Deutscher Bund Heimatschutz, 18
- 17) BUCHWALD, K. (1968) : Geschichtliche Entwicklung von Landespflege und Naturschutz in Nord-, West- und Mitteleuropa : Handbuch für Landespflege und Naturschutz, Bd. 1, Bayerischer Landwirtschaftsverlag, 101
- 18) BERGMANN : 前掲, 124～125
ルドルフ自身の郷土保護の考え方は、自然や田園を賛美するロマン主義的な審美観に根ざしている。自然界や農民たちの半自然の世界というのは、「若がえりの葉をつくる『泉』であり、こうした世界は民族を合理主義に墮落させず、ドイツの心情を高揚させるものとして保存されなければならない」と保守主義の心情を吐露し、郷土保護は「赤色国際主義にもよく効く薬だ」と推奨している。近代の文明全般を拒否するルドルフは、鉄道に対して「昔ながらの輸送方法を抑圧し、その運転士は鍛冶屋やその他の手工業の職を奪っている」と非難している。ベルクマン (1970) は、このようにルドルフが近代的な社会構造の転換に対してアレルギーに反応する点を指摘しながら、「ルドルフの反動的な発議を連盟がすべてとりあげていたわけではない」からこそ「郷土保護連盟がアナクロニズムに陥らずにすんだ」としている。事実、初代会長にシュルツェ＝ナウムブルクが34才の若さで就任したが、ルドルフが連盟のイニシアティブをとっていたら後の郷土保護運動の展開はなかったであろうとベルクマンは次のように述べる。「もしルドルフに盲目的に従っていたならば、連盟はまちがいなく党派心の強い人々の反動的クラブになりさがって、ブルジョアジーの不確実な心情をもひきつけたネオロマンチズムの運動に発展しなかっただろう。」(BERGMANN : 前掲, 128)
- 19) ZUHORN : 前掲, 22
- 20) 「呼びかけ」には次のような活動分野が示された。この連盟の目的はドイツの郷土における自然的歴史的に固有なものを保護することとされ、①記念物保存 ②伝承されてきた農家町家の建て方の育成、現存する建物の保存 ③廃墟を含む自然風景の保護 ④その土地固有の動植物界ならびに地質学的特徴の救済 ⑤可動な物件である民芸 ⑥習俗、しきたり、祭、民族衣装の育成保存につとめることで、「呼びかけ」の署名には建築家ムテジウス、作家アヴェナリウス、森林美学のザリッシュの他、コンヴェンツ、ヴェテカンブなどの名がみられる。
Aufruf zur Gründung eines Bundes Heimat-

schutz (1903): 50 Jahre Deutscher Heimatbund, Deutscher Bund Heimatschutz, 1954, 59~67より

21) ZUHORN: 前掲, 29

22) 註⁴⁵⁾ 参照

23) SCHULTZE-NAUMBURG, P.(1907): Naturverschönerung: Die Gartenkunst, 1~5, 21~24

24) 景勝地保護の法案の上院への請願書の準備のためにドイツ造園協会と郷土保護連盟からそれぞれ専門家としてその作業に参加していた。

GLOGAU, A. (1907): Heimatschutz und Landesverschönerung — Gesetzentwurf gegen die Verunstaltung von Ortschaften und landschaftlich hervorragenden Gegenden —: Die Gartenkunst, 117~121

25) GRADMANN, E.(1910): Heimatschutz und Landschaftspflege: Verlag von Stecker & Schröder, 16

DAUMEL, G.(1961): Über die Landesverschönerung: Im Verlag Hch. Debus, 168

26) GRADMANN: 前掲, 47

27) HENNEBO, D.(1956): Ein Betrag zur Geschichte der Landesverschönerung: Gartenamt, 49

「自然志向へと変わる庭園芸術の改革は、まずはじめにイギリスの地でなされ、それは郷土保護の先駆となった」というグラートマンは、まだ歩み出してもない郷土保護運動に対して、好ましい運動の方向(彼にとって)を示している。しかし、この時点では郷土保護運動がまだ総括的に俯瞰できる状況ではない。すなわち、その後実際に展開した運動全体から位置づけた「先駆け」という意味ではない。(GRADMANN: 前掲, 4)

28) ZUHORN: 前掲, 24~25

29) ベルクマン(1970)によれば, Laufenburg の急流の保存を訴える郷土保護連盟の呼びかけに対して, マックス・ウェーバーらの署名があるという。(GRADMANN: 前掲, 脚注〈518〉, 131)

30) ZUHORNは, 郷土保護連盟がまずドイツ都市会議(1905年設立)と提携したこと, 次に自然保護公園協会, ドイツ農村福祉および郷土保存協会, ライプアイゼンの組織(Raiffeisen-Organisation), デューラー連盟(Dürerbund: F.AVENARIUSが1903年に設立した, ドイツの古い手工芸を範とする表現文化を志向する団体)との提携を重視している。その他全ドイツの成人学校やユースホステル組織と協力関係を結び, 国内のネットワーク化が進められた。

さらに国外ではスウェーデン, スイス, オーストリアにも郷土保護の協会が組織された。ことにオーストリアでは, ドイツ郷土保護連盟が, 1912年に団体の命名者となったという。郷土保護のための国際会議も開催された。(GRADMANN: 前掲, 26~27)

31) ZUHORN: 前掲, 28

32) ZUHORN: 前掲, 39~40

33) ZUHORN: 前掲, 26

34) ZUHORN: 前掲, 37

35) ZUHORN: 前掲, 35

36) ZUHORN: 前掲, 28

37) Min.-Rat Dr. HIEKE(1936)の発言。

ZUHORN: 前掲, 28より

38) アヴェナリウス(AVENARIUS, Ferdinand)は Kunstwart 誌を主宰し, シュルツェ=ナウムブルクも同誌にしばしば論文を寄稿していた。Kunstwart 誌は, 郷土保護連盟のようにナショナルが強調されるが, たとえナショナリズムではないにしても, リベラルな市民階層よりもずっとナショナル・リベラルな層に影響を与えていたという。

(BERGMANN: 前掲, 134)

39) ZUHORN: 前掲, 37

40) BERGMANN: 前掲, 134

41) ZUHORN: 前掲, 37

42) ZUHORN: 前掲, 38

43) ZUHORN: 前掲, 37

44) ZUHORN: 前掲, 40

45) ①シュルツェ=ナウムブルクは民族性の担い手から, Masse(大衆)と国内の少数民族を除外していた。ドイツ民族の“人種的滅亡”の危機を感じた彼は, 誤った社会政策や教育施策によって“劣等なるもの”の蔓延が助長され, 芸術や文化が失われたと主張し, やがてナチズムに打開の道を求めるようになっていくのである。(ZUHORN: 前掲, 39)

②シュルツェ=ナウムブルクへの評価: シュルツェ=ナウムブルクは, のちにナチスの文化政策に同調する建築家及び国家主義的な芸術理論家として活躍することになるが, はじめからそうした思想の持ち主ではなかったようである。

グラートマン(1910)は彼を風景画から建築芸術の分野へと華々しく転身した芸術家として評価している。すなわち, ヴィルヘルム時代以来の芸術の不在をその著作『Kulturarbeiten』であばき, 昔のものであっても有用かつ良質な芸術的作品を再評価したことである。(GRADMANN: 前掲, 3)

シュルツェ=ナウムブルクに徹頭徹尾批判的な BERGMANN(1970)でさえ「彼の名誉のために…」と前置きをして, 郷土保護連盟の初代会長としての

功績を評価している。「シュルツェ＝ナウムブルクは保守的ではあるが、洗練され、一考に値する人物であり、反動的なドルフとは区別される。郷土保護連盟が設立される前に、やらねばならないことがあった。それはすべての関連の団体の統合、そして相互のよりよい調整や協力体制をつくり上げることであった。もしそれが成功したとするならば、シュルツェ＝ナウムブルクの功績である。」(BERGMANN: 前掲, 129～130) BERGMANNは、さらに郷土保護連盟の会長をしていた時代の初期のシュルツェ＝ナウムブルクをナチスのイデオログとして活躍した後期から切り離して評価しようとする論文(BRENNER, H. 1963)をあげながら、これを不十分としている。(BERGMANN: 前掲, 脚注<513>, 130)

- 46) Masse (大衆)を切り捨てようとするシュルツェ＝ナウムブルクに対してヴァーゲンフェルトはこれを救済すべきだと主張するが、ここには人種問題が潜んでいる。Masse といっても人種としてドイツ民族を意味する。工業地帯に大量に労働力として流入してくるスラブ人その他の民族に負けないように、ドイツ人に対する国民(民族)教育をしなければならないとしている。ヴァーゲンフェルトにとつての郷土問題は、建築や風景、慣習、言語などではなく、むしろ人種や血統の問題であった。(ZUHORN: 前掲, 40)
- 47) WAGENFELD, K.(1930): Industrie und Volkstum: Jubiläumsschrift des Bundes Heimatschutz(ZUHORN: 前掲, 41より)
- 48) WAGENFELD(1925/26): Mitteilungsblatt, Nr. 2(ZUHORN: 前掲, 40より)
- 49) ZUHORN: 前掲, 44
- 50) ZUHORN: 前掲, 45
- 51) ZUHORN: 前掲, 46
- 52) ゾーンライは、この委員会の設立を呼びかけた1896年には農村の状況を改革するためのプログラムを計画していた。実際の農業者とゾーンライの思想との関係はどのようなものだったのか。BERGMANN(1970)は農業者同盟(Bund der Landwirte)とゾーンライとの関係について次のように評している。「そのプログラムは——ゾーンライが率直に認めたように——無論、農村に住む人々の個人的な幸福のためだけではなく、現行の国家・政府の体制および社会経済関係のためのものであった。ゾーンライは地主に対してよく鋭い批判を浴びせたりする人物であったが、このプログラムをよりにもよって

“ドイツ農業者同盟”の会合で発表したのである。しかしそこでは批評家よりはむしろマリオネット、改革好きな自主独立の批評家というよりは保守的なイデオログと思われたにちがいない。」

(BERGMANN: 前掲, 91～92)

- 53) ZUHORN: 前掲, 42～43

ゾーンライは、1893年から1948年まで本文にあげた2つの雑誌の他に7つの雑誌の編集をしている。Das Land (1892～1924), Die Landjugend (1896～1948), Archiv für innere Kolonisation (1909～39), Zeitschrift für das ländl. Fortbildungswesen in Preußen (1909～35), Landjugend-Freizeit (1928～38), Neues Bauern-tum (1934～38), Schriften für neues Bauern-tum (1934～40)これらの雑誌は農民の職業意識を自覚させ、彼らの教育と福祉を改善することを目的としたものであった。(BROCKHAUS: 1973)

- 54) BERGMANN: 前掲, 92
- 55) BERGMANN: 前掲, 96～97
- 56) BERGMANN: 前掲, 87
- 57) BERGMANN: 前掲, 97

BERGMANNは、農業者同盟を大河にたとえれば、ドイツ農業福祉及び郷土育成協会の存在は、その隣に流れるとるに足らぬ小川にすぎないと評している。

- 58) ZUHORN: 前掲, 46
- 59) ZUHORN: 前掲, 46～47

『血と土』(Blut und Boden): 農民詩、郷土詩の分野が、ナチスの意にそうように、望ましい国民像や風土に根ざしたものへの賛美や古代ゲルマンの血統の後継者として農民をまつりあげたりする『血と土』の文学となっていった。ナチスはこれを推進した。

- 60) バウハウス(Bauhaus): 1919年ドイツのワイマールに国立バウハウス・ワイマールの名で設立された美術工芸学校。25年にデッサウに移り、ナチスによって32年に閉鎖され、ベルリンに私立バウハウスを設けたが、33年にこれも解散させられた。芸術と工業を統一することで新しい建築や工業をめざし、同校における教育・造形活動は近代デザイン、建築に重要な影響を与えた。バウハウスの友という後援会には建築家ペーレンス、画家シャガール、ココシュカ、作曲家バルトーク、物理学者アインシュタインらの名がみられ、この新芸術の学校を支援した。
- 61) 利光 功(1970): バウハウス 歴史と理念: 芸術出版社, 190～195

Zusammenfassung

Der Verfasser versucht, zwei Punkte zu erläutern :

- Der Geschichtliche Hinter- und Soziale Beweggrund für die Gründung des Deutschen Heimatschutzbundes (1904)
- Der Wandel der Tätigkeit und der Zielsetzung der Heimatschutzbewegung im Zeitraum von der Gründung bis zum Ende der 1920er Jahre. Dieser Zeitraum bringt die Wende „vom Schutz zur Pflege“ .

Betrachtet man die Entwicklung des Heimatschutzes, so wird deutlich, daß das durch den Bund von RUDORFF neu geprägte Wort „Heimatschutz“ während der ersten 25 Jahre des Bestehens der Sammelbegriff für alle Bestrebungen, die sich auf Retten und Erhalten der natürlichen und geschichtlichen Kulturwerte richten, war.

Diese anfangs stark gefühlsmäßige Einstellung des Heimatschutzes wandelt sich aber — vor allem unter dem Einfluß von AVENARIUS — besonders im „Kunstwart“ wurde die neue Auffassung vertreten.

Neues Ziel ist die „Ausdruckskultur“, das heißt, die Erkenntnis, daß jede äußere Erscheinung der Ausdruck eines bestimmten, sie verursachenden Lebenszustandes ist. Sie führte zur Suche nach der Übereinstimmung von Form und Inhalt.

Neben die Erhaltung von Werten, deren Weiterbestehen man sichern wollte, trat allmählich das Wirken für gutes neu Geschaffenes. Mit der Zeit konnte der Heimatschutzbund sich diesen neuen Bestrebungen immer mehr widmen, da die einstige Haupttätigkeit des Heimatschutzes — Schutz der Natur- und Kunst-Denkmäler — mehr und mehr Aufgabe staatlicher Stellen geworden war. In diesem Wandel kritisierte SCHULTZE-NAUMBURG (1927) die Bezeichnung „Heimatschutz“ als nicht ausreichend. Es entstand eine neue Sichtung und Klärung der Heimatpflege und Kritik an der bisherigen Heimatschutzarbeit, welche bis dahin so oft nur Angelegenheit des Gefühls war und blind für die Notwendigkeiten der sich wandelnden Umwelt.

Die Heimatschutzbewegung wandelte sich nun immer deutlicher vom Schutz zur Pflege. Die Bewegung wollte die heimatliche Eigenart in ihren gegenwärtigen und zukünftigen Kräften und Gestaltungen erkennen und auch fördern. Außerdem wurde erklärt: „Heimat“ allein sei kein ausreichendes Ziel für die Pflege, sondern „das Volk“ sei ebenfalls einzubeziehen. Das Volk schütze die Heimat und trage das Volkstum.

Die Idee der Hinwendung auf den Menschen als Träger des Volkstums kam auf. Dieser Gedanke zog die Frage nach sich, wie das Volk gepflegt werden solle.

Die Notwendigkeit der Volkspflege rührte von der sozialen Unruhe seit der zweiten Hälfte des 19. Jahrhunderts her. Die verstärkte Mobilität der Bevölkerung verursachte nämlich eine Krise der Identität des deutschen Volkes.

Die gestiegene Mobilität der Bevölkerung in der zweiten Hälfte des 19. Jahrhunderts führte zu Heimatlosigkeit und sozialer Unruhe. Es herrschte Angst vor dem Rückgang der landwirtschaftlichen Produktion durch die abnehmende Zahl der landwirtschaftlichen Arbeitskräfte (Untergang der Gutsherrschaft). Eine Identitätskrise entstand

- einmal weil die einstige Kultur nach und nach verschwunden war und
 - zweitens, weil das Eindringen andersgearteten Volkstums die bodenständige Kultur gefährdete.
- Jetzt sollte also das deutsche Volk erhalten und gestärkt werden, damit es fremden Einflüssen widerstehen und sie überwinden könne.

Diese Aufgabe machte sich die Heimatschutzbewegung zu eigen, indem sie sich den Menschen als Träger des Volkstums widmete mehr oder weniger nach den Ideen des Nationalismus.